

佛教の眼

しゅうかつ えんぎ ほう 終活と縁起の法

宇佐市・佐藤第二病院 院長

龍谷大学大学院教授

た ばた まさ ひさ
田 端 正 久

昨今、医療現場において、ACP (Advance Care Planning, 本稿末尾註参照) について関係者同士で相談し合えるように……と、国が求めてくるようになってきました。それにともない、高齢者が【終活】に関心を持つことも推奨されています。

そのような状況の中で、ある高齢の真宗門徒の方から、次のような相談を受けました。「私は十年ほど前から遺言書を用意しています。また最近【終活】として、私の人生の後始末の仕方について、家族に希望を伝えています。これからは皆、家族に迷惑をかけたくないという思いからです。」

しかし、このごろ思うのは、はたしてこれからの行為が、真宗(佛教)の教えに適っているのか?ということ。中でも終末医療のあり方については、大いに迷うものがあります。正直なところ、私としては生命維持装置に繋がれて生き永らえることは避けたいと思っています……この方は、お寺で熱心に真宗の教えや佛教一般について学ばれているお方です。

私自身も、自分の人生の後始末の仕方について、意思表示しなければならぬ年齢になりました。そこで、私は自分の最低限の希望(肉体的な苦痛は緩和して欲しい、不自然な延命はやめてほしいなど)を妻や子供に言葉で伝えましたが、その他の事については、わたしの死を見守ってくれる人たちの考えや思いに『お任せ』することにしました。

さて、前述の相談に対して、わたしは、佛教の「縁起の法」や真宗の教えにもとづいて、次のようなお答えをいたしました。

我々、真宗門徒は、人間とは「縁次第」で如何なる振る舞いもすることを教えられ、受け取っています。死にざまも縁次第であり、我々の思いで管理、支配できるものではありません。

また、「死の縁無量なり」と教えられており、実際、天変地異も種々の事故も、

自分の老いも病も、管理・支配できません。

社会状況、医療状況も変化していますが、死の縁無量なる事を、日々、医療現場で経験しています。自分の希望通りに展開して欲しいけれど、こればかりは「佛さまにおまかせ、南無阿彌陀佛」するしかありません。

「家族に迷惑かけたくない」と云う殊勝な気持ちも、つづめれば、子供や縁のある人から「良い人、良い親であった」と思われたいという自己中心の気持ちの表れ、佛法を無視した、

自力のはからいの結果ではないでしょうか。我々の理知分別にもとづくみかたは、「物の表面的な価値を計算する見方」です。そして打算的に考え、自分の思い通りに事を管理・支配し進めたいと考え、これが苦悩の原因です。

佛教のものの見方は、全体的・根源的な見方であり「ものの背後に宿っている真の意味を感得する」見方です。その見方で考えると、縁次第で如何なることも起こる。それならば自分の希望を縁ある者には伝えるけれど、あとは「佛さまにおまかせ、南無阿彌陀佛」です。

そして、迷惑をかけるかも、と云う心配については、縁起の法に依れば、人間は迷惑をかけずに生きてゆけない……ということがしらせられます。それならば、それも佛さまにお任せするしかありません。佛教では、迷惑をかけずに生きてゆけないことに気づくことの大切さを教えています。

そこで中條ふみ子さんの短歌、「遺産なき母が唯一のものとしてのこしてゆく死を子らは受け取れ」のように、終活のどうのこうのではなく、

親の死に様が、人間は縁次第で如何なる死に様にでもなるという、子供や孫への教えとなる。すなわち、「人間とは、人生とは」を教えるきかいなのです。縁ある者の死を通して、人生とは、人間とはを学ぶご縁にしてほしいということを伝えるべきだと思います。

家族がその親の気持ちを深く受け取るとき、親は、「にんげんとは、人生とは」を教えしてくれた菩薩であったと受け取ってくれるでしょう。

註 APC 患者本人と家族が医療者共に、あらかじめ今後の医療や介護について話し合ったり意思決定が出来なくなったときに本人に代わって意思決定をする人を決めておくプロセス。
(大法輪11月号より転載)